

[論文]

印欧祖語の成節流音をめぐって

——スラブ語前史における「開音節法則」とメタテーゼ——

神山 孝夫

0. はじめに

印欧祖語には、母音交替 (*Ablaut*) の動きに伴って音節副音 (子音) としても音節主音 (母音) としても機能するソナントと呼ばれる音韻の範疇が想定される。ここにはいわゆる半母音の **y* (**i*) と **w* (**u*) に加えて、流音と鼻音、並びにラリンガルあるいは喉音 (*laryngeals*) と称される一連の音⁽¹⁾ が属し、これらは本来のアクセント音節で母音 **e* が保持された正常階梯、あるいは後代に生まれたと考えられる *o* 階梯において、前後に母音が置かれれば音節副音となり、無アクセント音節でその母音が縮

(1) 周知のことだが、『一般言語学講義』で名高い Ferdinand de Saussure が僅か 21 歳で著した *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes* (Paris, 1879) において想定された *coefficients sonantiques* に相当する。現在では三種を想定し、*H*₁, *H*₂, *H*₃ と記号化するのが一般的であるが、Saussure が想定したのはその後者二つにあたる。それぞれ隣接する母音の質を変えない、隣接母音を *a* にする、隣接母音を *o* にする性質を持ち、隣接母音が縮減した場合にはこれら自身が音節核となって *schwa indogermanicum* とも呼ばれる **ə* に一致する。これらラリンガルの音声的実現に関しては諸説があるが、隣接母音への影響から考えてそれぞれ声門音、咽頭音、唇軟口蓋音である蓋然性が非常に高い。Martinet (1994: 141ff.; 神山訳 1999: §9.30ff.) の解説を参照されたい。

減したゼロ階梯においてはこれらのソナント自身が音節核の役割を担い、特に成節ソナント (*syllabic sonants*) と呼ばれる⁽²⁾。

小文の目的は、印欧祖語の成節ソナントのうちの成節流音 (*syllabic liquids*)⁽³⁾ がスラブ語においてどのような経緯を経て現状に至ったのかに関し、従来の定説とは異なる提言を行うことにある。また、この提言には大きな副産物がある。去り行く 20 世紀のスラブ語前史研究において金科玉条のごとく扱われてきたスラブ語前史における開音節化のプロセス、あるいはいわゆる「開音節法則」(*das Gesetz der offenen Silbe*)⁽⁴⁾ には例外が存在すること、さらにこの法則が終幕を迎えた時期は従来の定説よりも早期であることが指摘されるのである。

この主張の本質部分についてはすでに Kamiyama (1998) の導入部 (0.7) に略述した。だが、それはサンスクリットとラテン語等の場合と並んで古代教会スラブ語のシグマによるアオリストにおける語根母音延長が二次的であることを示すための前提として、母音体系の変遷を素描する過程でのことであつたため、勢い記述は非常に圧縮され、また対象は古代教会スラブ語に限られていた。ここに敢えてスラブ語の歴史的発達全体に関わる自説を明示し、諸兄のご叱正を求めたいと思う。

(2) 成節ソナントには問題の記号の下に小さな丸を加えて表記するのが慣例である。ただし、半母音の *y と *w が音節核となる場合には一般的な文字である *i と *u が用いられる。

(3) 一般にこの音韻単位は Osthoff が 1876 年にはじめて想定したとされ、この発想を応用して同年に Brugmann が有名な鼻音ソナントの提言を行い、これをきっかけに Junggrammatiker が誕生した。早熟の天才 Saussure は何と 15 歳 (1873) にして彼らと同じ結論に達していたらしい。後述されるように (3.3), 多少不明瞭だが Miklosich は 1850 年に成節の流音を想定している。だが、それよりもはるかに早い 1823 年にフランスのインド学者 Burnhouf なる人物がこの成節ソナントという発想に到達しているという。この点については風間 (1978: 175ff.), Szemerényi (1990: 38f.) を、この音韻単位のさらに以前の状態に関しては以下の註 6 を参照されたい。

(4) Nahtigal (1961: 9).

1. 印欧祖語の成節流音と各語派での反映

1.1 印欧祖語⁽⁵⁾の末期に想定される長短の成節流音 (*r̥, *l̥, *r̄, *l̄⁽⁶⁾) は原則としてそのまま保持されることはなく、流音の前後に音節核の役割を担う二次的な母音が付加された。これは流音や鼻音が音節核となる場合にかなり頻繁に生じ、挿入母音 (*anaptyxis*) ととも呼ばれる一般音声学及び通時音韻論的によく知られた現象である⁽⁷⁾。

1.2.1 単純な、すなわち短い成節流音 IE *r̥, *l̥ の各語派での反映を例示しておく。階梯の異なる形態のみ文証される場合には、問題の形態を括弧に入れて加えた。

印欧祖語	*r̥	*mr̥-t-「死んだ」 ⁽⁸⁾	*kr̥d-「心(臓)」
ヒッタイト語	ar	(mer-)	kard-
サンスクリット	r̥	mr̥-tá-	hr̥d-á-
アヴェスタ	ərə	mərə-ta-	zərəδ-aya-

(5) Martinet (1994: 119ff.; 神山訳 1998: §7.11ff.) の指摘を待つまでもなく、印欧祖語自体も長い歴史を持ち、その性質は時代を追って変化した。詳細は他所に譲るが、想定される最古の印欧祖語は「一語＝一音節」であり、次の時代にこれらを組み合わせて複音節語を形成する習慣（すなわち曲用や活用）が漸次発達し、無アクセント母音の弱化・脱落等を経て母音交替が生じた。本稿で用いる印欧祖語とは、母音交替、曲用、活用が生まれ、ラリンガルと称される音韻が失われて長音が生じた状態、すなわち印欧祖語の歴史の中のほぼ最終段階を指す場合が多い。

(6) 任意のラリンガルをHで示し、正常階梯を記せば、本来的にそれぞれ *er, *el, *erH, *elH という連続に起因する。印欧祖語はその古層においてあたかも英語、ドイツ語、ロシア語に代表されるような強いストレス・アクセントを有する言語であったと考えられ (cf. 神山 1995: 188ff.), 上記の連続は本来的な無アクセント音節に位置した場合にそれぞれ母音部を弱化によって失い (ゼロ階梯)、流音が音節核となった。後にラリンガルの脱落に伴って先行する音節核が代償延長され、長音が生じる。

(7) 挿入母音は時に「萌芽母音」(独 *Sproßvokal*) や「寄生母音」(仏 *voyelle parasite*) のようにも、あるいは少し視点を変えて「支え母音」(仏 *voyelle d'appui*) やサンスクリットの文法用語を借りて *svarabhakti* のようにも呼ばれる。その音声学的メカニズムと現代諸語の例については神山 (1995: 206f.) を参照されたい。

(8) 以下の各語に見られるように、その派生語はしばしば「死すべき存在」すなわち「(地上の) 人間」の意味に発達する。

ギリシア語	αρ/ρα	(βροτός「人」 ⁽⁹⁾)	καρδία~κραδία
ラテン語	or	mor-tuus	cord-is 属格
アルメニア語	ar	mar-d「人」	(sirt)
古アイルランド語	ar/ri	marb「死人」	cride
現代アイルランド語	ar/ri	marbh /márəv/	croí /kri:/ ⁽¹⁰⁾
ゲルマン祖語	ur	*mur-ðar「殺人」	(*hert-ōn)
ゴート語	aúr [ɔr]	maúr-þr	(hairtō)
リトアニア語	ir/ur	mir-tis「死」	šird-is
古代教会スラブ語	ръ/ръ	сь-мръ-тъ	srъd-ьce ⁽¹¹⁾
ロシア語	ер/ор	смерть	сердце
印欧祖語	*l̥	*w̥l̥k ^w o-「狼」	*ml̥-du-「やわらかい」
ヒッタイト語	al	walkuwa-	maltah̥hi「私は祈る」 ⁽¹²⁾
サンスクリット	ṛ	v̥ka-	mṛdú-
アヴェスタ	ərə	vəhrka-	(marəd-) ⁽¹³⁾
ギリシア語	αλ/λα	λυκός メタテーゼ	βλαδύς
ラテン語	ol	lupus メタテーゼ	mollis
アルメニア語	al	(gayl)	(mełk)
古アイルランド語	al/li	(fāel)	(meldach「気持ちよい」)
現代アイルランド語	al/li	(faol /fi:l/)	(meallach /m'áləx/)
ゲルマン祖語	ul	*wulfaz	(*meltan「溶ける」)
ゴート語	ul	wulfs	(gamalteins「溶解」)
リトアニア語	il/ul	vīlkas	mūlkis「馬鹿な」
古代教会スラブ語	лъ/лъ	вѣкъ	(mladъ)
ロシア語	ол	волк	(молод(ой))

(9) o階梯 (*mor-) に由来する μορτόςとゼロ階梯 (*mr̥-) に本来期待される *(μ)βρατόςの混交形と解される。*mr̥- が挿入音 (epenthesis) を加えて *mbr̥- に、さらに br̥- に至る推移の音声学的根拠については神山 (1995: 209ff.) を、印欧祖語の成節流音の反映に見られるギリシア語の方言的差異については Palmer (1980: 68) を参照されたい。

(10) r の後に綴られた o は母音としての実現を持たず、先行の r が非硬口蓋化音 (広音 leathar /l̥áhər/, 英 broad) であることを表示する。

(11) *k が *i > *ɐ に後続する位置で *c [ts̺] に転じている。これは発見者 Courtenay の名で呼ばれることもある、いわゆる第 3 次硬口蓋化の作用によるものである。2.4 に触れる音節内調和によって付随的に末尾の o が規則的に e に転じる。類例として Gmc. *kuningaz (cf. E. king, G. König; Finn. kuningas) からの借用語 OCS кнѣзь (R. князь) を挙げておく。詳細は省くがスラブ語形はゲルマン祖語形から導かれる。

(12) 「神をなだめる (やわらかくする)」の意味より転化したと考えられる。Feist (1939: 192).

(13) IE *melH₁- (cf. Gk. μαλακός, Hitt. malisku-) のゼロ階梯に由来すると考えられる。

1.2.2 上の表を見れば、印欧各語派で一様に挿入母音が用いられ、問題の流音の成節性が排除されている様が観察される。挿入母音はほとんどの語派で問題の流音の前に置かれる傾向が見られるが、ケルト語とギリシア語では流音の後に生じる場合もある⁽¹⁴⁾。

1.2.3 スラブ語はバルト語及びゲルマン語とほぼ軌を一にし、問題の流音の前に狭母音 **i* あるいは **u* を挿入することで問題の流音が音節核の役割を担うという不安定な状態を回避したと考えられ⁽¹⁵⁾、スラブ語最古の状態であるスラブ祖語 (PS) には「狭母音 (**i, *u*) + 流音 (**r, *l*)」という結合が想定される。9 世紀終わりからの古代教会スラブ語にはスラブ語の方言分化の萌芽がすでに見られるが、このようなスラブ語の言語的統一の崩壊、すなわち諸語の分岐が生じる直前の段階（共通スラブ語：CS⁽¹⁶⁾）に至ると、PS **i, *u* はその質を弛緩する。その音声実現の詳細について確言することは難しいが、慣用に従ってこれらの反映を「弱母音」(*редуцированные*) と呼び、それぞれ CS **ь, *ѣ* で表記すれば、印欧祖語の成節流音は前史の最終段階である共通スラブ語で「弱母音 (**ь, *ѣ*) + 流音 (**r, *l*)」という連続に転じたと表現できる。上に示した古代教会スラブ語の例では表記上「流音 + 弱母音」という反映が現われるが、これは印欧祖語の成節流音に由来する問題の音連続が子音の間に位置した場合

(14) ギリシア語については O'Neil (1970) 等を、ケルト語については Bernardo Stempel (1987), Pedersen (1937: 4f) 等を参照されたい。

(15) ゲルマン語では一様に *u* が用いられるが、スラブ語派及びバルト語派における挿入母音 *i* と *u* の分布あるいは使い分けについてはいまだ満足行く説明は得られていない。一例に Shevelov (1964: 86ff.), Kurylowicz (1956: 229) 等の試みを参照されたい。

(16) Birnbaum (1966) によって提唱されたスラブ語前史の二段階の区別に基づく。略言すれば、PS は後期 IE の帯気閉鎖音を無気音とした他、**a, *o, *ə* を **a* に、**ā, *ō* を **ā* に合一させ、長短 **i, *e, *a, *u* の 4 母音体系を得た。2 モーラ音節核が失われた段階を CS と称し、結果的に **i, *ь, *e, *ѣ, *a, *o, *ь, *u, *y* の 9 母音体系（及び鼻母音 **ę, *ǫ*）が得られる。子音の変化が行われた時期はまちまちであり、例えば本来的な前舌母音の前で生じたいわゆる第一次硬口蓋化は PS の時代に、二重母音が単母音化した後に想定される第二次硬口蓋化は CS の時代に生じたと考えられる。PS 及び CS の呼称の由来に関して概略的には神山 (1992: 98) を、母音体系の変遷に関しては Kamiyama (1998: 39-41) を参照されたい。

のみに見られる一種の方言的改新であると言い得る (cf. 3.1ff.). 現に上に記したロシア語は CS「弱母音+流音」の規則的発達である «e/o+p/л» を示している. この改新を促した閉音節排除の傾向については第 2 節に, その音声実現についての従来の定説, 筆者の試案, この音連続の歴史的発達全般に関してはそれぞれ第 3, 4, 5 節に詳述する.

1.2.4 サンスクリットには挿入母音が綴られておらず, 祖語の成節流音が保持されたように見えるが, それは見かけの上でのことである. インド・イラン語派では *r と *l が一般に *r に合一したため, この語派では成節流音 IE *r̥, *l̥ は区別されず, サンスクリットでは r̥ で, アヴェスタでは通常 əra で現われる. サンスクリットの r̥ が表記の上で, あるいは音韻論的に成節の流音であるのは恐らく確かだが, 周知のようにバラモンはこれに挿入母音 [i] を加えて [ri] と発音する⁽¹⁷⁾. すなわち, 音声学の現実としては成節流音が挿入母音の付加によって排除されているのだが, 音韻論のレベルにはこの状態が反映されていないと言える. また, アヴェスタの表記は常に謎に満ちており, 確言は困難だが, 百歩譲ってサンスクリットの場合と同じく, 綴られた əra が音韻論的には成節流音 r̥ を表わすとしても, その表記からすれば音声学的には母音的要素がその前後に付随したと考えられる.

1.3.1 成節流音 IE *r̥, *l̥ にラリンガルと呼ばれる音韻が後続していた場合には, ラリンガルの無音化に伴って先行する音節核が代償延長 (*Ersatzdehnung*) され, 長い成節流音 IE *r̥, *l̥ が生じたと想定される. しかし, インド・イラン語派を含めてこの想定される音韻単位を保存する印欧語派はなく, すべての語派で挿入母音が用いられて, 問題の流音の成節性が排除されている.

(17) 例えば R̥gveda が英仏独露語で Rig-Veda, Rigveda, Rigweda, Ригведа, あるいは日本語で「リグヴェーダ」と呼ばれるのは, この挿入母音を明示化しているからである.

印欧祖語	*ǵ	*ǵǵ-no- 「穀粒」 ⁽¹⁸⁾	*pǵ-wo-/mo- 「第一の」 ⁽¹⁹⁾
ヒッタイト	arh	—	(parā 「前に」)
サンスクリット	īr/ūr	jīrṇá- 「古さ」 ⁽²⁰⁾	pūrva-
アヴェスタ	arə	zarəta- 「老いた」	(paurva- 「前の」)
ギリシア語	ρᾱ	(γέρων 「老人」)	πρῶτος ⁽²¹⁾
ラテン語	rā	grānum	(prīmus)
アルメニア語	ara	(cer 「古い」)	aī 「～に向かって」 ⁽²²⁾
古アイルランド語	rā	grán	(ro- 「強意」)
現代アイルランド語	rā	grán	(ro-)
ゲルマン祖語	ur	*kornam ⁽²³⁾	*furma- ~ *furista-
ゴート語	aúr [ɔr]	kaúrn	(fruma) faúr 「主」
リトアニア語	ir/ur	žirnis 「豆」	pīrmas
古代教会スラブ語	ръ/ръ	зръно	рръвъ
ロシア語	ер/ор	зерно	перв(ый)
印欧祖語	*l̥	*w̥l̥-nā 「羊毛」	*p̥l̥-(no-) 「満ちた」
ヒッタイト語	alh	hulana- メタテーゼ	palhi- 「広い」
サンスクリット	īr/ūr	ūrṇā	pūrṇā-
アヴェスタ	arə	varəṇā-	pərəṇa-
ギリシア語	λᾱ	λᾱνος ドーリス方言	(πλήρης)
ラテン語	lā	lāna	(plēnus)
アルメニア語	ala	(geḥmn)	(li)
古アイルランド語	lā	MIr. olan(n)	lán
現代アイルランド語	lā	olann	lán
ゲルマン祖語	ul	*wulnō	*fulnaz
ゴート語	ul	wulla	fulls
リトアニア語	il/ul	vilna	pīlnas
古代教会スラブ語	лъ/лъ	vьna	рльнь
ロシア語	ол	волна	полн(ый)

(18) この語義はギリシアを除くヨーロッパのみに見られ、故地から西方に移動した印欧人全般に共通する語彙的改新の一つに数えられる。Cf. e.g. Гамкрелидзе & Иванов (1984: 943). 非ヨーロッパでの「穀粒」の呼称については同書 p. 694 を参照されたい。

(19) 語根 *per- は「前に」を原義とする。

(20) その原義は「熟した」であると考えられる。

(21) ドーリス方言形。アッティカの標準形は πρῶτος.

(22) IE *p- > Arm. h- が通常だが、不明の条件のもとに無音化する一連の例が存在する。

(23) 居住環境によって様々な意味に転じていて興味深い。英語 corn はイングランドでは小麦、アイルランドでは燕麦、新大陸ではトウモロコシを、ドイツ語 Korn は南ドイツでは小麦、北ドイツではライ麦をそれぞれ示す。Martinet (1994: 249, 251).

1.3.2 長い挿入母音あるいは流音の前と後に挿入母音を加えることによってかつての長音性あるいは2モーラ性が保持されたとみなしうる語派が多いが、ゲルマン、バルト、スラブの三語派では見かけの上で長短の成節流音の扱いに差異はない。ただし、バルト語とスラブ語ではラリングルの脱落による代償延長で生じた長音節にはアキュートと呼ばれる音調が発生し、後のアクセントの扱いが異なるため、この点を含めれば長短の成節流音の反映は異なっている⁽²⁴⁾。

1.4 スラブ祖語、あるいはそれを受け継いだ共通スラブ語の段階までに関する推論は比較言語学的にも、一般音声学的あるいは通時音韻論的にも、また現代諸語からの内的再建の見地からも無理はなく、その妥当性を疑う根拠は見当たらない。

2. スラブ語前史の「開音節法則」

2.1 スラブ語がその前史において段階的に閉音節を排除したことはまちがいない。このプロセスの具体的な現われは下記のように総括できよう：

①音節末の **t/*d* に **t* が後続する場合に生じる **tt > *st*

IE **woid-ai* > PS **vaidai* > CS **vědě* (OCS *vědě*⁽²⁵⁾ “*I know*”) に対し

IE **woid-tos* > **woittos* > PS **vaistas* > **vaistu*⁽²⁶⁾ > CS **věstь*

(24) 詳細は他所に譲るが、アキュート音節はリトアニア語で (ˑ) で記される下降調となり、ロシア語の充音（母音重挿 *pleophony*, *полногласие*）構造では第二の母音にアクセントが落ちるほか、セルビア・クロアチア語の初頭音節では短・下降調 (˘) に、チェコ語の二音節語の初頭音節では長音 (ˑ) となるなどの点から判定される。逆にサーカムフレックス音節はリトアニア語で (˘) で記される上昇調となり、ロシア語の充音構造では第一の母音にアクセントが落ち、セルビア・クロアチア語の初頭音節では長・下降調 (ˑ), チェコ語の二音節後の初頭音節は短くなる。ただしリトアニア語の *ir, il, ūr, ūl* はアキュートの表示である。

(25) ヒットライト語のいわゆる *-hi* 活用にも残る本来的な *perfectum* の一人称単数語尾は **H₂e (>*a)* に遡る。Martinet (1994: 211f.), Szemerényi (1990: 363ff.), 山口 (1995: 262ff.) 等を参照のこと。序ながら山口 (1995: 271) 12行目に記された **-ǵ₃o* は **ǵ₂e (= *H₂e)* の誤記であろう。スラブ語でこの語尾を残す唯一の形態が OCS *vědě* である。

(OCS věstь “known”)

②語末子音の脱落

IE *domus (cf. Lat. domus) > PS *damus > CS *domъ

(OCS domъ, R. дом)

IE *mātēr (cf. Gk. μήτηρ) = PS *mātēr > *mātī⁽²⁷⁾ > CS *mati

(OCS mati, R. мать)

③語中の音節末にある噪音 (obstruent) の脱落

IE *supnos (cf. Gk. ύπνος) > PS *supnas > CS *sъnъ

(OCS sъnъ, R. сон)

IE *wopsā (cf. Lat. vespa, Lith. vapsà⁽²⁸⁾) > PS *vapsā > CS *vosa(OCS osa⁽²⁹⁾, Cz. vosa)

④下降二重母音 (falling diphthong) の単母音化

IE *bheroi (cf. Gk. φέροι) > PS *berai > CS *beri (OCS beri, R. бери)

IE *snoig^whos (cf. Goth. snaiws, Lith. sniēgas) > PS *snaigas> CS *sněgъ⁽³⁰⁾ (OCS sněgъ, R. снег)

末尾には現在を積極的に示すために hīc et nunc の -i が加えられたと考えられる。

(26) 一般に o 語幹名詞・形容詞の男性単数主格, 対格, 複数属格等の語尾において IE *o は CS *ъ に対応する。*o > PS *a が *u への狭母音化を生じたと考えられるが, その原因は判然とせず, また中性の場合には同じ音声環境にあってもこの狭母音化が見られない。この点に関しては納得できる説明は知られていない。

(27) この場合に見られる例外的な *ē > PS *ī > CS *i の推移に関しては神山 (1992) を参照されたい。後期印欧祖語の長母音 *ē, *ō が後続音の脱落による代償延長によってさらに延長される環境に置かれると, スラブ祖語では代償的な狭母音化が行われたと考えられる: cf. CS *dъkti (OCS dъšti, R. дочь) vs. Lith. duktė (< *duktēr < IE *dhugH₂ter-); CS *kamy (OCS kamy, R. камень) vs. Lith. akmuō (< *akmōn < *H₂ek-mon-), etc.

(28) ここに記したラテン語形やゲルマン語形 (E. wasp) にはメタテーゼが見られる。今日のリトアニア語では vaspvā が普通である。また IE *wopsā はさらに *webh- “to weave” に遡ると考えられる。

(29) Kamiyama (1998: 61) に記したように, 筆者は OCS osa, R. oca 等の初頭に v- の要素が欠けている現象を過剰矯正によると考えている。つまり OCS osmъ, R. восемь, Cz. osm や R. острый ~ вострый 等にまま見られる後舌母音の前の語頭添加音 (prothesis) v- と問題の語源的な v- とが混乱した結果であろう。

(30) IE *ai, *oi は一般に CS *ě に対応するが, o 語幹複数主格と命令法 2 人称単数の末尾にある場合に限り CS *i が対応する。この不思議な現象の成立理由も謎のままで

⑤擬似下降二重母音 (*falling diphthongoid*) 「母音+m/n」の鼻母音化

IE *g^wenām (cf. Goth. qinōn⁽³¹⁾) > PS *genāN⁽³²⁾ > CS *ženq⁽³³⁾

(OCS ženq, Pol. žena, R. жену)

IE *bheronti (cf. Skr. bhāranti⁽³⁴⁾, Gk. φέρωντι⁽³⁵⁾) > PS *beranti

> CS *berqъ (OCS berqъ, Pol. bera, R. берут)

⑥擬似下降二重母音 「o/e+流音」の改変

IE *moldhos (cf. Lat. mollis, OE melde) > PS *maldas

> pre-CS *moldъ > { 南 *mlōdъ > *mlādъ > OCS mladъ
東 *molodъ = OR молодъ (R. молодой)
北西⁽³⁶⁾ *moldъ > Pol. młody

IE *bherghos (cf.) > PS *bergas

> pre-CS *bergъ > { 南 *brēgъ > *brěgъ = OCS brěgъ
東 *beregъ = OR
北西 *brégъ > Pol. brzeg

ある。

(31) 第一次ゲルマン子音推移 (グリムの法則) により IE *g^wは無声音の*k^wとなりゴート語でqと綴られる。IE *eはゴート語でiに転じる。IE *ā, *ōはゲルマン語で*ōに合一する。ゲルマン語は語末で*m, *nの区別を失い、nが現われる。

(32) スラブ語はギリシア語やゲルマン語と同様に語末で*m, *nの区別を失う。歴史時代には文証されないため、その調音点を明示しないNを記すのが慣用になりつつある。

(33) 前舌母音の前に置かれた軟口蓋音 CS *k, g, x は規則的に調音点を前進させč, ž, šに転じる。スラブ語の第一次硬口蓋化とも呼ばれるよく知られた推移である。なお、「口蓋化」が硬口蓋化の意味で用いられることがあるが、これは誤解に基いており適当でない。軟口蓋も硬口蓋も口蓋の一部であるから、例えば「軟口蓋音の口蓋化」は「スパゲティーをパスタにすること」のような無意味な表現となってしまう。

(34) インド・イラン語ではIE *e, *a, *o はいずれも *a に対応する。

(35) 比較言語学的に予想される形態に一致するドーリス方言形。アッティカの標準形は末尾の -ti が -si となり、先行する on が鼻母音化と代償延長を経て ū となり ou と綴られるため φέρουσι である。摩擦音の直前にある母音+鼻音が鼻母音化するのは日本語にも見られるよく知られた現象である。この点については神山 (1995: 137ff., 221ff.) を参照。

(36) ここで南はいわゆる南スラブ語にチェコ語とスロバキア語を加えたグループを、東はいわゆる東スラブ語を、北西はその他の西スラブ語を指す。ポーランド語を除くレヒ語群は一見不可解な対応を示す。この分布については Carlton (1990: 145ff.) に詳しい。

2.2 上で採用した各プロセスの記載順序は、それらが生じた相対年代 (*relative chronology*) の順序に一致する。ただし、この順序についてはさらに綿密な検討を施す必要があるかもしれない。

①はしばしばスラブ語内の変化に扱われ、母音を V で、音節の切れ目を (-) で表わせば、Vt-tV を V-stV とすることによって開音節化が達成されたと説かれることも多い。だが、後期印欧祖語の *tt はインド語派以外のすべての語派で改変を受けており、例えば IE *wid-to- > *witto- (語根ゼロ階梯) に由来する Av. vista- “known” (cf. vaēd-), Gk. ἄφιστος “unknown” (cf. οἶδα) 等に同様の推移が観察される点を考慮すると、①はスラブ語派成立以前の変化であって②に先行するとみなし得る⁽³⁷⁾。しかし、この点についての最終的な判断は他日を期したい。

①が③に先行することは論理的に必然である。すなわち③のプロセスが行なわれれば、音節末の噪音が排除され、*Vt-tV のような連続はもはや存在しなくなってしまう。他方、②と③の配列に関しては確たる根拠はない。

下降二重母音はすべて単母音に転じている。いわゆる yo 語幹名詞と yā 語幹名詞の複数対格において鼻母音の発達に南北で相違が見られる点⁽³⁸⁾,

(37) *tt はインド語では保存され、イラン、ギリシア、バルト、スラブで st が、ラテン、ケルト、ゲルマンで ss が対応する: e.g. Skr. vitta(ka-), Lat. visus (< *vissus, 長音は完了 vidi より), OIr. fess, Goth. (un)wiss (cf. G. gewiß). この現象に関してはかつて *tt が *tst となって、初頭の t が失われて st が、末尾の t が失われて *ts > ss が得られるという説明が行われていた。高津 (1954: 144) にもこれに類する記述が見られる。だが、重子音 *tt が *tst に発達するとは考えにくい点、加えて *tst からの t の脱落に明確な根拠が見出せない点に難がある。音声学的には「閉鎖音+閉鎖音」の一方を摩擦音に異化した現象とみなすほうがはるかに有望である。Szemerényi (1990: 108) 及び諸言語の例と音声学的根拠については神山 (1995: 185ff, 260) を参照されたい。

他方, Martinet (1994: 167f.) は *tt > *s という斬新かつ大胆な想定を行い、これに hypercorrection によって語根末あるいは接尾辞初頭の t が再度加えられたとみなす。その場合 tt を示すサンスクリットではその両方が復活したことになる。このサンスクリットの reflex が何らかの改新の結果であることは彼の師 Meillet (1937: 131) もすでに記しているところである。Martinet はこの想定からさらに活用 2 人称単数の s や指示代名詞に見られる s- と t- の交替 (e.g. Gk. ὅ, ἡ, το) の起源までも導いてしまう (同書 188f, 210)。この驚嘆すべき想定のは是非に関しては誌面を改めたい。

(38) IE *-yons, *-yāns > PS *-jans, *-jāns より音節内調和を経た *-jens, *jēns が想定され

並びに「下降二重母音＋鼻音」という結合が直接に鼻母音化した形跡が認められない点の2つの根拠により、④⑤の順序は妥当と思われる。

⑥はスラブ諸語間での反映に上述のような大きな相違、言い換えれば明らかな方言差が見られる以上、厳密には共通スラブ語の崩壊期以降に生じた現象と解さざるを得ない。

④⑤は⑥とともに「母音＋ソナント」に起源を有する、いわば広義の下降二重母音の排除とも総括できるため、これらを一括してこの序列の末尾に置くのが適当と考えられる。

2.3 上記の推移のうち①はスラブ語派の成立以前の変化であると考えられるが、②～⑥は明らかにスラブ語派内で生じた変化である。これらの推移はすでに Broch (1911: 263) や Mikkola (1921) によって部分的に開音節化の現象として捉えられていたが、ソルボンヌに教鞭を取る Wijk は「きこえ漸増の傾向」(*die Neigung zur steigenden Sonoritätswelle*)⁽³⁹⁾ というさらに大きな傾向として全一的な把握を成し遂げた。彼は古代教会スラブ語の歴史を綴った Wijk (1931: 39ff.) の前史部分においてこのようなみごとなまとめ方を披露し、それ以前の例えば *Фортунатов* や *Шахматов* あるいは *Vondrák* に見られるような *ad hoc* で信憑性が感じられない、あるいはかつて好まれたことばを用いれば *atomistic* な理解を一掃することに成功したのである。その後この書にはロシア語版 (1957) が出たことに加え、この全一的な把握はリュブリャーナの Nahtigal (1938, 1952²) に受け継がれ、同書のドイツ語版 (1961)、ロシア語版 (1963) を通し、冒頭にも記した通称「開音節法則」として広くスラブ語前史研究者に受け入れられるに至った。

るが、南方諸方言では鼻母音 *ɐ* が現われるのに対して、北方諸方言では鼻音性を欠く *ě* (いわゆる第3の *ять*) が生じる。*yā* 語幹名詞単数属格にも類似の現象が観察される。この点については Mareš (神山訳 1996) に加えた訳註 27 を参照されたい。

(39) 上記の過程のほかにも、主として外来語における弱母音の挿入 (Gk. *ὄργανον* — OCS *orgānъ*) や、母音にはじまる語に加えられる語頭添加音 (*prothesis*; cf. R. *острый* — *вострый*)、子音連続の様々な改変 (e.g. **ob-vežati* > OCS *obězati*, **iz-rekti* > OCS *izdrešti*) などの諸現象が含まれる。Wijk (1931: 46ff.) を参照。

2.4 TCLP 第2巻で Jakobson (1929) により定式化された通称「音節内調和」(*Silbenharmonie* あるいは *synharmony*)⁽⁴⁰⁾ と, Broch, Mikkola, Wijk, Nahtigal による「開音節法則」が得られたことにより, スラブ語の前史を司る二大音韻法則がここに出揃うことになった⁽⁴¹⁾.

2.5 印欧祖語の成節流音のスラブ語における反映である CS **ьr*, **ьr*, **ьl*, **ьl* が子音の前に位置する場合, これらの「弱母音+流音」は必然的に閉音節核を形成する. この連続が再度成節流音へと転じたとする Miklosich にはじまる想定や, Фортунатов の考える **ьr* 等への発達が正しいならば, この連続はすでに共通期において開音節化されたことになる. だが次節に詳述するように, そのような想定には無理があると言わねばならない. また, 例えば CS **сьмьрьть*, **вьлкъ* に由来する R. *смерть*, *волк* や Pol. *śmierć*, *wilk* が今日に至るまで「母音+流音」を示している点からして, 少なくとも一部のスラブ方言においては CS **ьr* 等の閉音節は排除されなかったとも考え得る.

2.6 一般に, スラブ語の「開音節法則」がその効力を失ったのは, 弱母音の脱落あるいは完全母音化の時点であると考えられている. だが, 上記の議論からすると, 流音に終わる閉音節は共通スラブ語が終幕を迎えるまで存続していたことが明らかとなる. このような閉音節のうち, 共通スラブ語の「完全母音 (e, o) + 流音」という擬似下降二重母音は方言分化以降に各方言によって様々な方法で開音節に改変された (2.1 の⑥) が, 「弱母音+流音」の開音節化を達成しなかった方言も存在する. すなわち, スラブ全土にわたる開音節法則は, 弱母音の喪失に先立ち, 「完全母音+流音」の開音節化をもって失効したのである.

(40) 具体的には隣接の前舌母音 (類) によって計三度にわたって引き起こされた軟口蓋音の硬口蓋化, j の前に位置する子音の様々な変化 (jotation), 及び硬口蓋 (化) 音に続く後舌母音の前舌化, あるいは唇軟口蓋音の前に位置する前舌母音の後舌化という現象として具現する. これらの現象の生じた相対的な順序や時期については捨象する.

3. 古代教会スラブ語の成節流音説

3.1 印欧祖語の成節流音は、上記第1節に記したような経緯を経て共通スラブ語の「弱母音 (ъ, ь) + 流音 (r, l)」という連続に達する。IE *bher- “to take” と IE *mer- “to die” を例に取ると、そのゼロ階梯 *bhr̥- > CS *bъr-a-ti = OCS bъrati (R. брать), あるいは *mr̥- > CS mъr-qtъ > OCS mъr-qtъ (R. умрут) に見られるように、その連続は古代教会スラブ語においても保持されている。ところが、この連続が子音の間に位置するときには古代教会スラブ語は異なる反映を示し、srъdъce や vlъkъに見られるような「流音+弱母音」という文字の連続に対応する。ここで検討しなければならないのは、この「流音+弱母音」という文字連続がどのような音声的実現を反映していたのか、という問題である。

3.2 従来、もっぱら行われている解釈はOCS rъ, lъ等を成節の流音 r̥, l̥の表記とみなす説である⁽⁴²⁾。これを「成節流音説」と略称する。これに従えば成節流音 IE *r̥, *l̥ に由来する CS *rъ/*lъ, *yl/*yl が、歴史時代にまたもや成節流音 r̥, l̥ に戻ったことになる。この説が広く受け入れられるに至った要因には下記の二点が指摘できよう。すなわちカリスマ的存在であった Leskien がこれを採用した点、加えて上の2節に記したスラブ語前史の開音節の法則と矛盾しない点である。

3.3 筆者が行った調査に従えば、この説を最初に唱えたのはどうやらウィーンの Miklosich らしい。彼は 1850 年に著した *Lautlehre der alt-slovenischen Sprache* においてこのような解釈を採った⁽⁴³⁾。これはその二

(41) 例えば Mareš (1991², 神山訳 1996) を参照。

(42) これらに硬軟の区別があったとする議論もあるが、ここでは省略する。筆者はこの議論には否定的な立場を採る。

(43) 彼の用いる Altslovenisch は字句通りには「古代スロベニア語」を意味するが、これは当時ドイツ語圏で一般的であって Schleicher も用いていた Kirchenslavisch 「教会スラブ語」や、後に Leskien が用いる Altbulgarisch 「古代ブルガリア語」と同じく、現在の呼称で言うところの Altkirchenslavisch 「古代教会スラブ語」に等しい。Miklosich

年後にまとめられた大著の第1巻 Miklosich (1952: 34ff.) に再掲されている。当時は母音交替のメカニズムに関しサンスクリットに準拠した理解がなされており⁽⁴⁴⁾、今日から見ればこの点に根本的な不備があつて、彼の理路全体を把握するのは容易でないが、彼が古代教会スラブ語の子音間に位置する *гъ* 等をサンスクリットの成節流音 *ṛ* と比定し、*гъ* 等の綴りに対応する音声実現を「母音の *ṛ* と *P*」(„die vocale *ṛ* und *P*“)と呼んでいることから、いわば祖語の段階から古代教会スラブ語まで成節流音が保持されたとみなしているらしい⁽⁴⁵⁾。

3.4 ライプツィヒの Leskien は周知のように青年文法学派の中心的人物のひとりであり、このグループの有名なスローガン「音韻法則に例外なし」(*Ausnahmslosigkeit*) も彼に帰す。Leskien は古代教会スラブ語のバイブルとも言うべき *Handbuch* (の少なくとも第2版 (1886) 以降) において成節流音 *ṛ, ɪ* 説を採っている。これが Miklosich に倣ったことは明らかだが、筆者が参照した第2版の露訳 (1890: 26ff.) と第8版 (1962: 34ff.) ではこの説の priority が Miklosich にある点についてまったく触れられておらず、この説が Leskien 自身に帰すような印象さえ与えている⁽⁴⁶⁾。

はパンノニアをこの言語の中心地とみなし、スラブを表わす OCS *slověнь* やフライング断片 (*Brižinski spomeniki*, Freising leaves) を重んじてこの呼称を選択したのであるが、その選択の背後には彼のスロベニアに対する故郷愛も感じられる。

(44) 印欧祖語に関する理解の変遷については Benware (1995²) を参照されたい。

(45) 当時プラハにあって古代教会スラブ語の記念碑的な最初の文法を書いた Schleicher (1952: 49f.) はこの説に異論を唱えた。その骨子は、今日の用語で言うならば、OCS *гъ* 等に対応するのは Miklosich の想定したような祖語のゼロ階梯ではなく、正常階梯であるという趣旨であり、この点での Schleicher の主張は実は誤りである。ただし、後述するように OCS *гъ* 等が文字通り「流音+弱母音」という音声実現を持っていたという Schleicher の指摘は恐らく正鵠を得ている。この誤った批判に屈して後年 Miklosich は自説を曲げ、Schleicher の説を採ったらしい (*Ueber den Ursprung der Worte von der Form aslov. trъt*, Wien 1877; ただし筆者未見) が、これが Leskien (1879) の猛烈な批判を浴びることになる。恐らくこのとき以来、成節流音説の提唱者が Leskien であるとの誤解が広まることになった。

(46) 残念なことに NACSIS Webcat を見る限りわが国の公的図書館等にはその初版 (1871) は収められておらず、近未来的にこれを目にする機会はなさそうだが、その初版と第二版との間に註3にも記した Osthoff と Brugmann による印欧語の成節ソナント

Leskien の *Handbuch* は 1990 年発行の第 10 版を数えるまで、実に一世紀以上にわたって版を重ねている。Miklosich にはじまるところの、問題の文字連続「流音+弱母音」が成節流音の表示であるとする見解が定説化したのも、この書の影響と権威によるところが大であるのは間違いない。

3.5 結果として、古代教会スラブ語の「流音+弱母音」が成節流音の表示であるとする説は絶対的多数の研究者に支持、あるいは踏襲されている。わが国で公刊されたものを含めて、ほとんどの研究あるいは概説書が無批判にこの立場を採る。枚挙に暇がないが例えば下記がこれに該当する：

Wijk (1931), Nahtigal (1937), Vaillant (1950, 1964²), Селищев (1951), Черных (1952), Матвеева-Исаева (1958), Bielfeldt (1961), 菱山 (1964-1967), Борковский & Кузнецов (1965²), Иванова (1977), de Bray (1980), 佐々木 (1982, 1985), Schmalstieg (1983), Иванов (1983), 木村 (1985), Кривчик & Можейко (1985), Хабургаев (1986), Янович (1986), Vlasto (1986), Carlton (1991), Huntley (1993), Schenker (1993, 1996), Горшков (1994), 石田 (1996), Townsend & Janda (1996).

3.6 積極的にはこの説を支持しないかのような態度を取る研究者も散見

の提言 (1876) があり、これを受けて書かれた Miklosich の論文 (1877) の書評 (Leskien 1879) をものしているため、初版と第 2 版との間に彼の見解にどのような異同が生じたか大変興味を覚える。

Leskien は、同じ分野で明らかに大きな足跡を残した先達である Miklosich にも Schleicher にもなぜか好意的でなく、彼らを正當に評価することはほとんどない。ライプツィヒにあって比較文法の最先端を自らに任じた彼らの業績は無論偉大であり、我々が彼らに負うところは大きいが、Leskien のこのような姿勢といい、Brugmann の師 Curtius への非礼といい、何か非常に高慢で、人間性に欠けるところを感じる。波紋説で有名な Schmidt や Collitz の彼らに対する猛烈な批判も、『言語史原理』の Paul やライプツィヒ時代の Saussure が学術的には彼らに色濃く影響を受けていながら、彼らとあまり親交を結ばなかったのも、青年文法学派の排他的な気位の高さに端を発するような気がしてならない。

されるが、結局のところ彼らも暗にこの説に従っていると言える。

3.6.1 1876年からモスクワの、続いて1902年からはペテルブルクの比較言語学をリードした **Фортунатов** は共通スラブ語の ***ь** 等が ***ь̣** 等のように表記される「非成節的弱母音＋成節的流音」という状態に発達したとみなした。1914年に彼が没した後、1919年に公刊された講義録にこの見解が詳述されている（再版 **Фортунатов** 1957: 145ff.）。彼の影響からであろう、**Vondrák** (1906: 295; 1912²: 162ff.) やヘルシンキ大学の **Mikkola** (1913: 79) も同様の立場を採る。このような想定は今日にも見られ、例えば **Бернштейн** (1961: 207) や **Хабургаев** (1986: 100ff.) に受け継がれている。流音が音節核の役割を担えば、これに隣接する音節副音的な弱母音は先行子音にその前舌（軟音）性あるいは後舌（硬音）性を付加してそれ自身は音韻論的に無価値となることが期待されるから、この説は結局のところ成節流音説に合流してしまう。明示的に記せば、例えば CS ***вьхъ** > ***вь̣хъ** > ***v̥̣хъ** が OCS **вѣхъ** と綴られたとみなしているのである。だが、この想定には音論的に大きな無理がある。

3.6.2 **Jespersen** の *Lehrbuch* にはじまるきこえ (*Sonorität*) に基く音節理論に従えば、母音の中で最もきこえの小さな狭母音でさえ、子音の中で最もきこえの大きな流音や鼻音よりもきこえが大きいことは当然であり、「母音＋流音」という連続において流音が音節核となるような状態は考えられない。**Saussure** の *Cours* に説かれる内破・外破、あるいはそれを受け継いだ **Grammont** の漸強・漸弱による音節の定義は、きこえによる方法では説明できない音節をも説明する場合があるが、これによっても **ь̣** は考えにくい。慣例によって内破音あるいは漸弱音を (>) で、外破音あるいは漸強音を (<) で表わせば、**ь̣** であるためには **ь(>)r(<)** あるいは **ь(<)r(>)** でなければならないが、その前者では音節の切れ目が **ь** と **r** の間に置かれることになってしまい不適當だし、**ь** が口腔内での閉鎖や狭窄を伴わない母音であり、**r** が口腔内で瞬間的な閉鎖を一回以上伴う顫動音であるとみなす限り、**ь** が開口度のより大きな音の後続を予期する外破・漸強音となることを前提とする後者は不可能である。結局のところ、上記のような

主要な音節の定義に従う限り, h_1 のような状態は音声学的に考えられず, $^*\text{h}_1$ から $^*\text{h}_1$ への推移を受け入れることはできない。

3.6.3 天才 Saussure が故郷のジュネーヴに移るに当たってパリ高等学術研究院 (*École Pratique des Hautes Études*) の後継者となった Meillet は, 印欧語全体をバランスよく扱う能力にかけては恐らく他に追従する者のない, 20世紀最大の比較言語学者のひとりであり, またスラブ研究所 (*Institut d'Études Slaves*) の創設者であってパリのスラブ学の祖でもある。その彼 (1934: 73) も古代教会スラブ語の成節流音説には賛同できなかったと見え, Leskien が $^*\text{r}$ を記す位置に $^*\text{r}$ 等を記すことによって成節流音の想定を巧妙に回避している。だが, この $^*\text{r}$ も Фортунатов の $^*\text{h}_1$ と同趣旨であると考えられ, 結局は成節流音説に合一してしまう。

3.6.4 網羅的な文献学的資料に裏打ちされた精緻な研究にかけては多くの先達をしのぐかに見えるハーヴァードの Lunt (1974⁶: 33) は成節流音説を記しつつもこれに確信を持てない旨を吐露する。コロンビア大学の Shevelov (1964) やウィーンの Mareš (1991) は古代教会スラブ語の問題の文字連続がどのような音声的実現に対応するのかに関し, 明確な見解を表明していない。

3.7 上 (3.6) に記した研究者諸氏は有効な代案を提出できずに, 不承不承ながらも暗に成節流音説を容認したと考えられるが, このような煮え切らない態度を採らざるを得なかった理由はよく理解できる。

3.7.1 古代教会スラブ語にはここで問題にしている srъdъce や vъbъkъ 等の「流音+弱母音」のほかにも, 起源の異なる drъva ⁽⁴⁷⁾, krъvъ ⁽⁴⁸⁾ 等の「流

(47) Gk. $\delta\acute{o}\rho\upsilon$, Skr. dāru -「木材」(母音延長は改新), $\delta\rho\ddot{\upsilon}\zeta$ 「樅」, E. tree あるいは R. дерево にも見える IE $^*\text{deru}$ - “tree, wood” のゼロ階梯に接辞的な $^*\text{ə}$ (恐らく $^*\text{H}_2$) を加えて作られた IE $^*\text{drū}$ - を基礎とする。初期のスラブ語では次の語と同様にいわゆる $-\text{uv-}$ 語幹名詞 ($< -\ddot{u}-$) として扱われたはずだが, 集合名詞に転じたため新たに $-\ddot{a}$ 語幹名詞

音＋弱母音」が存在している。前者は印欧祖語の成節流音に、後者は「流音＋i/u」に由来するから、Diels に倣い、*rb* を代表としてこれらをそれぞれ「非起源的 (*unursprüngliches*) *rb*」及び「起源的 (*ursprüngliches*) *rb*」と略称できる。「非起源的 *rb*」の弱母音は完全母音化を生じないとされる点や、例えばロシア語で「非起源的 *rb*」は「完全母音＋流音」(сердце, волк) に、「起源的 *rb*」は「流音＋完全母音」(дрова, кровь) に発達している点からして、両者の音声具現には何らかの相違があったと考えられることが多い。「起源的 *rb*」はその由来からして古代教会スラブ語において文字通りの「流音＋弱母音」という音声実現に対応していたことは疑いない。そのため同じ綴りの「非起源的 *rb*」はこれと異なる音声実現を持っていたと予想することは根拠のないことではない。その際、「非起源的 *rb*」の起源と、当時有効であったはずの「開音節の法則」、また歴史時代には南方の方言で成節流音が、北方の方言で「完全母音＋流音」が対応する点などを総合すると、古代教会スラブ語の「非起源的 *rb*」が成節流音を表すとの見解が出てくるのも無理からぬことである⁽⁴⁹⁾。

3.7.2 だが、成節流音説を採った場合、弱母音の脱落を *ad hoc* に想定する必要が生じてしまう。弱母音は実際に不安定となり、弱い位置では脱落し、強い位置ではいわゆる完全母音化を生じるが、それは canonical な古代教会スラブ語の時代が終了した後のことであり、一般に古代教会スラブ語は弱母音を保持する。前舌の弱母音と後舌の弱母音に混乱が見られるのは確かだが、それは写字生の言語では両者の対立が失われ、[ə] のごとき実現を持つ単一の弱母音に縮減しつつあったことを示す⁽⁵⁰⁾。弱母

に改変されたと考えられる。

(48) Gk. κρέας, Lat. cruor, Skr. kravis- あるいは E. raw, G. roh, Lith. krūvinas「血まみれの」にも現われる *kreuə- “raw flesh” のゼロ階梯 IE *krū- に接尾辞 -i- を付して形成されている。

(49) Trubetzkoy (1968²: 77f.) はここで言う「起源的 *rb*」の場合よりも「非起源的 *rb*」の流音は長く、強く発された (quantitativ und artikulatorisch stärker) と考えるが、成節流音説と同様にこの主張の根拠も薄弱であると言わねばならない。

(50) 古代教会スラブ語の基礎となった南スラブ語では前舌と後舌の弱母音の差異が失

音を保存している段階にある古代教会スラブ語が CS *ьr/*ьr, *ьl/*ьl を成節流音 ʀ, ʁ とすることで開音節化を達成したと主張するならば、この位置に限って弱母音が早期のうちに脱落したと仮定する必要があることになる。このような仮定には当然ながら無理がある。

3.7.3 百歩譲って古代教会スラブ語に成節流音 ʀ, ʁ が存在していたと仮定しても、それを表記するために ʀь/ʀь, ʁь/ʁь という誤解を招く綴りを採用する積極的な理由が見当たらない。音節主音たる流音や鼻音を有する言語を見渡してみると、同じ調音的現実が機能的に音節副音となる場合にも、音節主音となる場合にも、同じ表記方法が用いられるのが常である⁽⁵¹⁾。例えばチェコ語の *prostě* 「単に」と *prst* 「指」、*velký*⁽⁵²⁾ 「大きな」と *vlk* 「狼」等を参照されたい。サンスクリットとその末裔が両者に全く異なる独立した文字を用いるのは完全に例外的である。この点からすると、古代教会スラブ語に成節流音が存在したなら、それらは単に r, l と綴られて然るべきである。

3.7.4 加えて言えば、一文字一音の原則に貫かれた精密な書記法を有する古代教会スラブ語において、文字通りの音声実現を有する「起源的 *ʀ*」が存在しているにもかかわらず、同じ綴りの *ʀ* がまったく別の「非起源的な」音声実現にも同時に対応していたとは考えにくい。これと同趣旨の指摘はすでに Schleicher (1852: 50) にも見られる。

われ、完全母音化に際しブルガリア語とスロベニア語では [ə] が、セルビア・クロアチア語では a が、また西スラブ語では e が文証される。両者の区別を保持するのはロシア語を代表とする東スラブ語のみである。

(51) 英語やドイツ語のように無アクセント音節の母音を弱化、さらには脱落させる傾向を有し、かつ表記と音声実現との間に一定の差異を持ち続けている言語では、その見かけ上の例外が存在する。例えば E. *mountain*, *bottom*, *middle* では下線の部分に記された母音字は母音としての実現を持たず、それぞれ鼻音あるいは流音が音節主音である。ドイツ語ではこの場合 *großem*, *Lebensmittel* に見られるように母音字 e が綴られるのが常だが、*Clinton* のような固有名詞の場合等にその他の文字も用いられる。この事情に関して詳しくは神山 (1995: 188ff.) を参照されたい。

(52) また *veliký* とも。

3.7.5 結局、これらの点からしても Miklosich 以来の成節流音説は容認し難いと言わねばならない。古代教会スラブ語の「流音+弱母音」(すなわち「非起源的 *rb*」) という綴りがどのような音声的実現に対応していたのかという点についての筆者の主張は次節に述べる。

3.8 また、印欧祖語の成節流音に由来し、古代教会スラブ語の「流音+弱母音」という文字連続に対応する音声的実現が、前史時代のスラブ祖語あるいは共通スラブ語の段階から成節流音であったとする誤った記述を目にすることもある。最近のものでは Schenker (1996: 94) がこのような立場を採っている。

3.8.1 このような立場は、① IE $*r > CS *r$, あるいは ② IE $*r > PS *ir > CS *br > *r$ のいずれかの想定に基いていなければならない。3.7.2 以下に記した根拠からして②の想定が受け入れられないのは当然のことである。上記の Miklosich が最初に主張したのはその①に当たる。これに従えば、印欧祖語の成節流音がスラブ語の統一が崩壊する時点まで保持されたことになるが、これはまったくありえない想定であり、この点については Leskien (1890: 26) の指摘は正しい。

3.8.2 この想定が不可能であることは、例えば OCS *čъръ* (R. *черный*) に見られる第一次硬口蓋化に注目すれば明らかである。これは Skt. *kṛṣṇa-*「黒い」と同様に IE $*kṛs-no-$ ⁽⁵³⁾ に遡り、ここから挿入母音を加えた PS $*kirsna-$ が導かれ、さらに順不同だが母音体系の変化と第一次硬口蓋化、及び接尾辞直前の $*s$ ⁽⁵⁴⁾ の脱落を経て、規則的に CS $*čъръ$ へと到達す

(53) $*kers-$ “dark, dirty” (Watkins 30) を語根とする。OPr. *kirsnan*「黒い」、正常階梯の Lith. *kėršas*「斑の」等を参照。

(54) $*i, *u, *r, *k$ の直後に位置する $*s$ はスラブ語において最終的に軟口蓋摩擦音 $*x$ に転じる。主旨に無関係であるし、また煩雑さを避けるため、ここでは *ruki-rule* とし、時に Pedersen の法則とも呼ばれるこの推移を捨象しておく。これと類似の現象はインド・イラン語、バルト語、アルメニア語にも見られ、これらの語派が成立する以前の印欧祖語の崩壊期に生じた推移である可能性もある。

る。挿入母音の PS *i > CS *ь が存在しなければ k > č の硬口蓋化は生じ得ないのである。

3.8.3 IE *_ɪ > CS *_ɪ が不可能な想定であることは語形成の観点からも当然である。一例に IE *mer- (OCS mrě-ti, R. y-мере-ть) を取り上げると、ゼロ階梯 *m_ɪ- を基礎として形成されたその人称形態 (e.g. OCS mьr-otь) は挿入母音を加えた PS *mir- の段階を経て得られる CS *mьr- を明らかに支持する。加えて言えば、ここから派生した継続相 (*durative*) あるいは反復相 (*iterative*) の語根 CS *mir- (OCS u-mir-a-ti) は、*m_ɪ- > PS *mir- から二次的な延長 (*vṛddhi*) を経た PS *mīr- に起因する。これは流音の前に挿入母音が厳然と存在していたことを示す確たる証拠である。IE *bher-/*bh_ɪ- に遡る OCS ber-otь / bьr-ati や継続・反復相 sь-bir-ati 等、同様の現象は多々見られる。

4. メタテーゼの想定

4.1 古代教会スラブ語に見られる非起源的な「流音+弱母音」という綴りが、Miklosich-Leskien 以来の定説である成節流音の表記でないとすれば、当然ながら綴られた通りの「流音+弱母音」を表記していた可能性を疑わなければならない。このような素直な解釈は次のような想定に基づくことになる：共通スラブ語の「弱母音+流音」が子音の間に位置するとき、古代教会スラブ語はこの連続を「流音+弱母音」にメタテーゼすることで開音節化を達成した。これを「メタテーゼ説」と略称する。

4.2 不思議なことに、従来このような至極当然の解釈の可能性はほぼ無視され続けてきた。それは、問題の非起源的な「流音+弱母音」とは別に起源的な「流音+弱母音」が存在しており、これらが異なる音声的実現を有していたはずだとする、いわば先入観があったという要因 (3.7.1ff.) と Leskien の権威に加えて、古代教会スラブ語に対する潜在的な過信があったためと思われる。すなわち CS *ьr 等は OCS rь 等を経て、広義の南スラ

ブ語における成節流音や、東及び北西スラブ諸語の「母音＋流音」に至ったという誤った認識が根底にあったと思われるのである。実際、古代教会スラブ語が南スラブ語の方言的特徴を示していることは周知の事実であり、問題の音連続において何らかの方言的改新を経たと想定することに何ら無理はないはずである。

4.3 この方言的推移を促したのは、もちろん上記の「開音節法則」である。すなわち、共通スラブ語の「完全母音＋流音」の場合に倣って、問題の「弱母音＋流音」という閉音節をも古代教会スラブ語はメタテーゼによって開音節に改変したことになる。

4.3.1 この推移は古代教会スラブ語に留まらず、いわゆる南スラブ語全般（セルビア・クロアチア語、ブルガリア語、マケドニア語、スロベニア語）に共通する推移であると考えられる。その根拠は、南スラブ語における「起源的 rv 」と「非起源的 rv 」の発達的一致である。Carlton (1990: 151ff.) によるその分布の詳細な調査を参照すれば明らかなように、南スラブ語においては両者とも後代の規則的な弱母音の喪失に伴って新たな成節流音に転じている⁽⁵⁵⁾。

また、この推移はいわゆる南スラブ語の枠を越えてスロバキア語、及び部分的にチェコ語にも共通して行なわれたように見える。これら諸言語の語群の枠を越えた共通の発達は、2.1の⑥にも記した流音に終わる擬似二重母音の発達にも見られることであり、これらを仮に「広義の南スラブ語」(SSI.)と総称することにしたい。

この用語を用い、現代のスラブ諸語を含めて「メタテーゼ説」を明示すると下記のようになる：**共通スラブ語の「弱母音＋流音」は子音間に位置するとき、広義の南スラブ語において「流音＋弱母音」にメタテーゼされ、後に起源的な「流音＋弱母音」とともに新たな成節流音へと発**

(55) さらに後の発達によって新たに挿入母音が加わったり、あるいは特に * $\bar{r}$ の場合には母音化が行なわれるが、この点については4.3.3以下を参照のこと。

達した。

以下に典型的な例を記す（イタリックは想定されるメタテーゼ）：

IE *su-mr̥-ti-⁽⁵⁶⁾ > PS *su-mir-ti- > CS *съ-мыр-тъ > SSL. (= OCS) съмрътъ
> *smr̥t' > SCr. smřt, Blg. смърт, Mac. смрт, Sln., Cz. smrt, Slk. smrt'

IE *w̥lkʷo- > PS *vilka- > CS *вѣлкъ > SSL. (= OCS) vѣлкъ
> *v̥lk > SCr. vûk, Blg. вѣлк, Mac. волк, Sln. volk [vouk], Cz., Slk. vlk

IE *kru-t-o-⁽⁵⁷⁾ > PS *kruta- > CS *крътъ (OR крътъ) > SSL. *křt
> SCr. křt, Blg. крът, Mac. крт, Sln., Cz., Slk. krt

IE *b(h)lu-s-ā⁽⁵⁸⁾ > PS *bluxā > CS *блѣха (= OR блѣха) > SSL. *bl̥xa
> SCr. bùha, Blg. блѣха, Mac. болва, Sln. bolha [bouxa], OCz. blcha
(Cz. belcha⁽⁵⁹⁾), Slk. blcha

4.3.2 広義の南スラブ語における新たな成節流音の発達はスラブ語の言語的統一が失われた後に生じた方言的プロセスであったはずであり、したがって後の弱母音の脱落、あるいは完全母音化と同時に行われたとみなすのが妥当であろう。弱母音の消滅と時を同じくして、共通スラブ語の「弱母音＋流音」はこれらの方言において新たに流音を音節核としたと考えられる。

(56) 初頭の *su- の部分は “well, good” (Watkins 67) を意味すると考えられるため、この語は本来「幸福な死、大往生」を原義とする。

(57) 語源についての定説はない。ここでは Pokorny (622) の掲げる *kreu- 及び Черных (1993, II: 446) に従った。

(58) スラブ語及びバルト語 (cf. Lith. blusà) の直接の基礎となった形態を記したが、ゲルマン語は語頭に無声音を持ち、異なる接尾辞を加えた o 階梯 *plou-k- (G. Floh, E. flea) を基礎としており、祖語の本来の形態の再建は難しい。Gk. ψύλλα, Lat. pūlex (<*puslex) は *plu-s- からのメタテーゼ（一説によればタブーのためとされる）を経ているように見え、また祖語に *b がほとんど現われないため、語根（正常階梯）は *pleu- であった蓋然性が高い。バルト語とスラブ語の基礎たる形態が語頭の閉鎖音を有聲（帯気音）化した原因は不明である。

(59) この新形は複数属格 belch からの類推によると考えられる (Nahtigal)。

4.3.3 問題の流音の少なくとも音韻論的な成節性は該当するほとんどの言語で保持されている。だが、ブルガリア語はこの状態を維持せずに挿入母音の $\mathfrak{b}$ [ə] を流音の前後に加えた「流音+ $\mathfrak{b}$ 」あるいは「 $\mathfrak{b}$ +流音」を示す。この挿入母音の置かれる位置はフランス語の e が発音される位置を決定する Grammont の「三子音の法則」と似た方法で決定される。すなわち通常は「 $\mathfrak{b}$ +流音」の順序となるが、これによると三つの子音の連続が生じてしまうような場合には原則として「流音+ $\mathfrak{b}$ 」の順となる⁽⁶⁰⁾。このような反映は、ブルガリア語がかつて成節流音の状態を経験したことを明瞭に物語っている。これにも似て、スロベニア語やマケドニア語では r が音韻論的に音節を担う場合、音素的でない挿入母音 [ə] を伴って [ər] と発音されるのが常である。極軽度ではあるが、同種の現象がセルビア・クロアチア語にも見られることがある⁽⁶¹⁾。また、特定の音声環境においては挿入母音によって流音の成節性が排除されている場合もあり、例えばブルガリア語、チェコ語、スロバキア語ではシュー音が先行する場合に r の前に新たな挿入母音 e が加えられるに至っている (e.g. Blg. черен, Cz., Slk. černý)。

4.3.4 上記のように成節の $*r$ は保存されることが多いが、 $*l$ はこれよりも安定性に乏しく、セルビア・クロアチア語では u に、スロベニア語では ol [ou] に母音化する。SCr. u がそこから発達するからには $*l$ が唇軟口蓋化した [ɮ] の状態を経たと考えられ、スロベニア語はこの成節音の前で予期される円唇化した新たな挿入母音 o を獲得した後に、音節末の [ɮ] が [u] に母音化したと考えられる。マケドニア語に見られるのは [ɮ] の母音化が生じる以前の段階である。また、ポーランド語、下ソルブ語とも共通する改新として、チェコ語では歯音の後の $*l$ の成節性が新たな挿入母音の u を後ろに加えることによって排除されており、これが延長を伴う場合には lou となる⁽⁶²⁾ (e.g. dlouh, dlouhý)。

(60) 詳しくは Townsend & Janda (1999: 291) を参照。

(61) IPA (1999: 67)。

(62) Nahtigal (1963: 162). Carlton (1990: 154) にはさらに詳しい音声環境が記されている。

4.3.5 チェコ語はこの推移に関して広義の南グループと残りの西グループ（北西スラブ語）との臨界線上に位置すると考えられ、その反例も見出される。下記の例のように、「起源的な *rb*」はその他の広義の南スラブ語が成節流音を、あるいは成節流音からの発達を示すが、チェコ語はこの位置で *ъ* > *e* を示す場合がある。

IE **krū-i-* > PS **kruvi-* > CS **krъvъ* (= OCS *krъvъ*)
 > SSL. **krv* > SCr. *křv*, Blg. *кръв*, Sln., Slk. *krv*, etc. // Cz. *krev*

この現象が生じる音声環境の特定は難しい。Carlton (1990: 154) は単に「強い」*trъt* がチェコ語で *tret* に転じる旨の記述を行なうが、これが不十分であることは明らかで、現に第一音節に強い *ъ* を持つ上記の CS **krъtъ* はこれに反し Cz. *krt* に発達している。いずれにせよこの推移に関してのチェコ語の位置付けについての判断には詳細な調査を要するが、この点については他日を期したい。

4.4 他方、広義の南スラブ語以外、すなわち東スラブ語とポーランド語を代表とする北西スラブ諸語は、メタテーゼを前提としない反映を示し、ここには共通スラブ語の最後まで残った閉音節「弱母音+流音」を開音節に改変した形跡が見られない。すなわち北部方言では閉音節排除の傾向が薄れ、「弱母音+流音」という閉音節は許容されるに至ったと考えられる。

4.4.1 後の東スラブ語（ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語）においては、この閉音節を排除すべく、上記の「完全母音+流音」の開音節化を模した第二次充音現象も見られた。だが、これは方言的な周辺現象に留まり、東グループ全般に広まることはなく、例えば現代ロシア文語には *веревка* や *золровка* 等、ごく少数の例が散見されるに過ぎない⁽⁶³⁾。

(63) その他の例については例えば Булаховский (1958: 111f.) を参照されたい。

東グループは南グループに見られるような流音を音節核とする状態を許容しなかった。したがって、この「弱母音+流音」という結合における弱母音は、続く弱母音喪失の時代において脱落を逃れ、すなわちいわゆる強い位置を獲得したため、その後の正常な発達に従って、前舌の弱母音は e へと、後舌の弱母音は o へとそれぞれ規則的に完全母音化した。

IE *su-mṛ-ti- > CS *sъ-mъr-тъ (OCS sъmъrътъ) > OR sъmъrътъ

> R., Uk. смерть, Br. смерць⁽⁶⁴⁾

IE *wĺkʷos > CS *vьlkъ (OCS vьlkъ) > OR вьlkъ⁽⁶⁵⁾

> R. волк, Uk. вовк, Br. воўк⁽⁶⁶⁾

4.4.2 上 (3.6.1) に記したような Фортунатов 流の解釈に従うと、共通スラブ語の *ьr は *ьr̥ として開音節化を達成し、例えば CS *vьrхъ > *vьr̥хъ > *v̥r̥хъ より OCS *vьrхъ を得、東スラブ語では *vьr̥хъ が開音節のみを許容する時代を脱した後に再度 *vьrхъ すなわち *vьr̥хъ に戻って、ここから OR вьrхъ > R. верх 等が導かれることになる。このような説明法は例えば Хабургаев (1986: 100ff.) にも受け継がれているが、*ьr̥ のような状態の想定が音声学的にまず不可能である以上、到底受け入れることはできない。CS *ьr が開音節化のプロセスを経ないままに東スラブ語に継承されたと解釈するほうが有望である。

4.4.3 ポーランド語を代表とする北西スラブ語群でも、東スラブ語群の

(64) ロシア語の方言にも見られる цоканье あるいは цыканье と呼ばれる現象により末尾音が [tsʲ] に転じている。

(65) 英語の母音の後ろに見られる「暗い L」と同様に л が「硬く」、すなわち唇軟口蓋化を伴って実現された [ɫ] であったため、音節内調和によってその前に位置した前舌の弱母音 ь が後舌の ь に変化している。

(66) ウクライナ語とベラルーシ語において母音の後ろに位置する「硬い」л が舌尖と歯茎との接触を失い、接近音の [w] に転じており、それぞれここに記したように綴られる。同様の現象は例えば英語やポーランド語にも見られるが、この点については神山 (1995: 174ff.) を参照。

場合と同様に「弱母音＋流音」がそのまま保持されたと考えられる。だが、その母音部分の現在における反映は音声環境によってさまざまであり、一見して非常に複雑な様相を呈す⁽⁶⁷⁾。以下では仮にこれらの言語の共通期、いわば北西スラブ祖語に想定される弱母音由来の母音を *a* で記した。また、特徴的なことにこの語群は *ь* の前に位置する子音のみならず、その後方にある子音までもが軟音性を獲得している⁽⁶⁸⁾。

IE **su-mr̥-ti* > CS **съ-мръ-тъ* (OCS *съмрътъ*) > **sm̥ǫr̥t̥* > **śm̥ǫr̥t̥*

> Pol. *śmierć*, USb. *smjerć*, LSb. *śmiers*

IE **wl̥kʷos* > CS **вѣлкѣ* (OCS *vl̥kѣ*) > **v̥ǫlk̥*

> Pol. *wilk*, USb. *wjel'k*, LSb. *wel'k*

4.5 上記の想定を採用することにより、下記のような古代教会スラブ語の形態論上の交替と、この推移を経験しなかった例えば古代ロシア語の形態との両方がいとも簡単に説明されることになる：

IE **mer-* “to die”

IE **mr̥-ont-i* > CS **мръотъ* > OCS *мръотъ*, OR *у-мьруть*, R. *у-мрут*

vs. IE **mr̥-t-wo-s* > CS **мрътвъ* > OCS *мрътвъ* // OR *мрътвъ*, R. *мёртвый*

IE **mr̥-l-o-s* > CS **мръль* > OCS *мръль* // OR *у-мьрль*, R. *умер*

(67) 詳しくは例えば Bray (1980b: 257ff.), Carlton (1990: 151ff., 249ff.) 等を参照されたい。

(68) これらの言語、特にポーランド語はここに記した点の他にも鼻母音の保存、軟子音の歯擦音化の多発、アクセント位置の改変、形態論における男性人間形の発達、等々の諸特徴によって他のスラブ諸語との著しい相違を示す。このような状況をもたらした原因を Martinet (1994: 111ff.; 神山訳 1998: §6.14ff.) はこの地域に居住していた先住民の言語の基層的影響に帰す。彼が想定する民族はウェネト人(ウェネディー)だが、この名を有する民族がヨーロッパにはこの他にヴェネツィアとノルマンディーのヴァンヌに足跡を残し、またスイスのボーデン湖の古代の呼称 *Venetus lacus* 周辺にもこの民族が居住していたと考えられる。この民族名 Lat. *Venetī* がゲルマン人によって東方の民族の一般的呼称に採用されたと仮定すれば、スラブ人の古い別称であるウェネディー、あるいはそのゲルマン語なまりであるウェネディーがここに由来するとも考えられる。この驚くべき発想の是非については他日を期す他はないが、これだけの状況証拠がそろそろこれを単なる絵空事とみなすことはほとんど不可能であろう。

IE *g^werā- “to praise”

IE *g^w̥₁-ont-i > CS *žьrǫtь > OCS žьrǫtь, OR жьруть

vs. IE *g^w̥₁-t-ei > CS *žьrti > OCS žьrti⁽⁶⁹⁾ // OR жьрѣти⁽⁷⁰⁾

IE *g^w̥₁-t-w-ā > CS *žьrtva > OCS žьrtva // OR жьртва, R. жертва

IE *terā- “to rub”

IE *t̥₁-ont-i > CS *тьrǫtь > OCS тьrǫtь, OR тьруть, R. трут

vs. IE *t̥₁-t-ei > CS *тьrti > OCS trьti // OR тьрѣти⁽⁷¹⁾, R. тереть

4.6.1 筆者は上記のような理路からメタテーゼ説に到達したのだが、本稿執筆に当たって文献の渉獵を多少してみたところ、この説を唱えたのは残念ながら筆者が最初ではないことが発覚した。1850年に Miklosich によって成節流音説が明らかにされたが、すでに Schleicher (1852: 49ff.) がこれに異論を唱え、古代教会スラブ語の非起源的な「流音+弱母音」がメタテーゼの結果であるとの解釈を提示している。無論、特に Brugmann と Saussure による大きな貢献によって到達した今日の高みから見れば、母音交替に関する彼らの把握は未熟であり、その議論には的外れな部分が含まれるのを否めないが、古代教会スラブ語が弱母音と流音との位置を入れ替えているという重要なポイントを彼が看破している点は見逃せない。また Schleicher (1861: 243) にも同趣旨の簡略な指摘が見られる。

4.6.2 比較言語学の発達史を階段に例えれば、Schleicher は Bopp や Grimm の段と青年文法学派の段とをつなぐ、とても重要な段の役割を果たした。実際、無声音・有声音・有声帯気音という 3 系列閉鎖音体系の想定、印

⁽⁶⁹⁾ 不定形の別形 žrēti は正常階梯の IE *g^werā- から出発し、*g^w̥₁-er-tei > PS *gertei > *žertei > CS *žerti を介し、規則的なメタテーゼを経て得られる。

⁽⁷⁰⁾ この不定形の形成には起源的でない *-ē- が加えられていると、また並存する жьрѣти は CS *žьrti より第 2 充音を経て形成されたと考えられる。

⁽⁷¹⁾ Черных (1993: 238) はこの形態を混交の結果であると疑うが、接尾辞 *-ē- が付加されて形成されたと見るべきであろう。

欧祖語の再建の試み、系統樹説、リトアニア語と古代教会スラブ語の文法など、彼の為した貢献、並びには我々が今日あまり意識せずに彼に負っているところは絶大である。他方、彼の不運には目を覆わんばかりである。政治的スキャンダルに巻き込まれてプラハを追われ、不遇のうちに 1868 年に 47 歳の若さで病没したばかりではない。死後になると、後進の攻撃の対象となり、彼の名声は完膚なきまで打ち砕かれてしまった。しかし、彼の残した論考には現在においても省みられるべき多くの着想が秘められている。ここで扱うメタテーゼ説やシグマのアオリストにおける語根母音の延長の原因 (cf. Kamiyama 1998) その他について、彼の真価は正当に再評価されねばならない。

4.6.3 上の 3.5 に記したような絶対的多数の研究者諸氏は Leskien の権威に屈した格好になっている。成節流音説を受け入れなかった少数の研究者の中にはその後 Шахматов (1915: 48f.) がいる。彼は 3.6.1 に記した師の Фортунатов の説に異論を唱え、結果的に Schleicher と同じメタテーゼ説を採った。だが、その記述から察するに恐らく彼は Schleicher の説も、Leskien の説も知らなかったようである。彼の見解は大筋で筆者の案と一致しているが、明白な根拠のないままに「起源的 *rb*」と *ьr* 由来の「非起源的 *rb*」にわずかに異なる音声実現を想定するなど、音声的な細部の再建方法に信憑性を欠く場合が多いことは否めない。また、彼は南スラブ語ばかりか西スラブ語も一般に共通スラブ語の「弱母音+流音」をメタテーゼしたとみなす。この判断において重きを置かれているのは ① 4.3.4 にも触れた歯音の後などの CS **yl > lu* と、② CS **er, *or, *el, *ol* の発達との平行性であるが、流音の前に挿入母音を加えられる場合が絶対的多数であるため①を一般化するには無理があり、また CS **er* 等の開音節化が終了した後に CS **ьr* 等の処理が行なわれたはずであるから、必ずしもこれらのプロセスに平行性を想定する必要はない。したがって、彼の見解の中の西スラブ語も「弱母音+流音」のメタテーゼを経験したとする点には同意しがたい。

4.6.4 Schleicher の場合と同じく Илѣхматов の見解もあまり注目を集めなかったらしく、この見解を彼から受け継いだ研究者は見当たらない。後に、Meillet の最後の弟子のひとり Martinet (1952: 152; 1955: 355) は、共通スラブ語の「弱母音+流音」が古代教会スラブ語で「流音+弱母音」にメタテーゼされたとする解釈の可能性を指摘したが、これは Schleicher や Илѣхматов とは無関係に彼自身の観察によるものである。また、Bräuer (1961: 77) も簡略にだが同じ立場を採っているように見える。近年では Чекман (1979: 147ff.) も絶対的多数の研究者が支持する成節流音説を無視してメタテーゼ説を採るが、彼はこの説の priority が Martinet に帰すと誤認している。

4.6.5 Diels (1963²: 62f.) は共通スラブ語の「弱母音+流音」が古代教会スラブ語で「流音+弱母音」にメタテーゼしたと明言しながらも、その中途の段階として成節流音を経たという通時音韻論的に容認し難い記述を施している。彼ほどの大学者でもやはり Leskien の権威との折衷の道を選んだのである。

4.7 この場合のように同一の現象に対して複数の説明法が存在する場合、かつ直接的方法によっては実際に生じたのがどちらのプロセスであるのかが確認できない場合、それらのうちいずれが勝るかを決定するにはいわゆる「オッカムのかみそり」(Occam's razor)⁽⁷²⁾ の論理による他はない。この観点からすればメタテーゼ説が成節流音説に勝るのは明らかである。まず指摘できるのは、メタテーゼ説を採った場合、3.7.2 以下に触れたように、共通スラブ語の「弱母音+流音」から弱母音が脱落したとする *ad hoc* な想定が不要となる点、古代教会スラブ語の表記と音声実現の間にずれを想定する必要がない点である。これらの根拠薄弱の想定が不要となるという意味においてオッカムのかみそりがメタテーゼ説に軍配を上げる

(72) Doctor Invincibilis (必勝博士)とも呼ばれた神学者・スコラ哲学者 William of Occam (1285?-1349) に帰される思考節約の原理: *Entia non sunt multiplicanda praeter*

のは必至である。

4.8 メタテーゼ説の唯一の弱点は、Leskien 以来、繰り返し指摘されているように、古代教会スラブ語の起源的「流音＋弱母音」においては完全母音化がまま見られ、非起源的「流音＋弱母音」にはこれが見られないとされる点である。筆者自身は、この現象が写字生の母語の干渉、あるいは単なる筆記の誤りに起因しているのではないかと疑っているが、もしこれが当たらないとすれば、確かにこれら 2 つの「流音＋弱母音」に異なる音声的実現を予想せざるを得ず、少なくとも上に記した単純なメタテーゼ説は成り立たないことになってしまう。この点についての疑問を解くためには網羅的な文献学的調査を実施し、個々の文献の言語的特色のみならず写字生の特定、その人物の言語的背景等を明らかにすることがまず必要であるが、その実現はかなり困難に思われる。諸兄の御教授・御協力によって近未来的にこの点に関する疑問が晴れることを切に希望する。その結果によっては上記のメタテーゼ説に修正を加える必要が生じるかもしれない。

5. 結論：共通スラブ語「弱母音＋流音」の変遷

Wijk を代表として提唱されたスラブ語前史における「開音節化」という全体的な把握はみごとであった。だが、創世記よろしく「はじめに開音節ありき」とも言い換えられる盲目的開音節信仰は愚かである。この信仰の呪縛を逃れ、これまで検討した様々な事情を勘案すれば、かなり単純な図式が浮かび上がってくる。すなわち、スラブ語の統一的発達が行なわれた最後の時期から方言分化が開始される時期にかけて、下記のような推移が行なわれたと考えられる。

5.1 スラブ語はその前史の過程で閉音節を順次排除した。だがこの「開音

necessitatem 「存在は必要もなく増やしてはならない」。

節の法則」には自ずから限界点が存在し、スラブ語の全領域においてすべての閉音節が排除されるには至らなかった。

5.2 開音節の法則に従って語末の閉音節、語中の噪音に終わる閉音節、下降二重母音が順次排除された。これに続いて「母音＋鼻音」という構成の閉音節は鼻母音化によって開音節に変換されたが、すでにこのプロセスの中途段階において南北の方言分化の萌芽（北 *ě* // 南 *e*）が現われ、スラブ語の共通的発達段階はほぼ終わりを迎える。この時点までに排除されていなかった語中の閉音節、すなわち流音に終わる閉音節は厳密な意味での共通スラブ語期を過ぎても存続することとなった。これには印欧祖語の擬似二重母音に由来する「完全母音＋流音」、及び印欧祖語の成節流音から発達した「弱母音＋流音」の二種がある。

5.3 方言分化が開始された直後の時点においては、いまだ閉音節排除の傾向は存続しており、残された流音に終わる閉音節のうち、「完全母音＋流音」は各方言において様々な方法で開音節に変換された。

5.3.1 スロバキア語とチェコ語の祖先を含む南グループ（広義の南スラブ語）ではメタテーゼの手段が採られた。だが、かつての「完全母音＋流音」という連続は擬似二重母音であって2モーラを有していたために、この2モーラ性を維持するための長母音化、あるいは起源的長母音の適用も併せて行なわれ、結果として「流音＋*ě/a*」という反映が得られる。

5.3.2 後の東スラブ語に発達するグループでは音節を閉じる流音の前に位置した母音をその流音の後ろにも加えるという、充音（母音重挿）とも呼ばれる手法によって開音節化を達成した。これはかつての2モーラ性を保持するための一つの方法であったとも考えられる。その結果は「*e*＋流音＋*e*」あるいは「*o*＋流音＋*o*」となる⁽⁷³⁾。

(73) また、*l*が唇軟口蓋化した [ɭ] であったと考えられるため、周知のように CS *el

5.3.3 ポーランド語を代表とするその他の西スラブ語（北西スラブ語）の祖先では開音節への改変のためにメタテーゼが行なわれたが、その際、南グループにおけるような母音の長音化は伴わなかった。こうして「流音+e/o」という開音節が得られた。

5.4 「完全母音+流音」という閉音節を排除するプロセスが終了した後にも「弱母音+流音」という音節核部を持つ閉音節がいまだに存続していた。この時期には閉音節排除の傾向も終幕を迎えつつあり、この最後の閉音節の処理方法に関して南北で大きな差異が生じた。

5.4.1 広義の南スラブ語においては、開音節法則の最後の現われとして、最後の閉音節「弱母音+流音」までもがメタテーゼによって開音節に変換された。こうして生まれたいわゆる「非起源的」な「流音+弱母音」は、以前より存在していた「起源的」な「流音+弱母音」と合一し、後代の弱母音消滅に伴って新たに成節流音へと転じた。

5.4.2 したがって、南スラブ語に属す古代教会スラブ語に現われる非起源的な「流音+弱母音」は一般に説かれる成節流音の表記ではなく、その音声的実現の素直な表記である。

5.4.3 ただしチェコ語は広義の南スラブ語の周辺地域に位置するため、この図式に完全に従うわけではない。そのため南スラブ語的な反映を示す場合も、北スラブ語的な反映を示す場合も並存する。

5.4.4 広義の南スラブ語以外（狭義の北スラブ語）においては閉音節排除の傾向が薄れ、「弱母音+流音」という閉音節は許容されるに至った。後の弱母音消滅の時代を迎えると、これらの方言では流音が音節を担う状態が許容されなかったため、上記の音節核における弱母音は単なる脱

は音節内調和の作用を受けて *ol に転じ、東スラブ語では olo という連続となる。

落を果たせずに、いわゆる強い位置を占めることによって完全母音に変換された。東スラブ語では弱母音の通常の完全母音化に従って「e/o+流音」が現われるが、ポーランド語を代表とする北西スラブ語は音声環境によって母音部の反映は複雑である。

5.5 一般に開音節法則は弱母音が消滅する時点をもって失効したとみなされる。しかし、上のような事情からすればこの限界点はより早期に、南北方言によって異なる時点に設定されねばならない。すなわち、南部方言に先んじて、北部方言では共通スラブ語の「完全母音+流音」が排除された時点で、この法則は終幕を迎えたのである。

付記

小文は、数年来暖めていた着想を基に、主に年末休暇を利用してまとめた論考に過ぎず、細部の検討における綿密さに欠ける部分があることを否めない。冒頭に記したように大方諸兄の御叱正を歓迎する。

(2000年12月24日)

略語表

Arm.	アルメニア語	Goth.	ゴート語	OR	古(代・期)ロシア語
Av.	アヴェスタ	IE	印欧祖語	Pol.	ポーランド語
Bg.	ブルガリア語	Ir.	現代アイルランド語	PS	スラブ祖語
Br.	ベラルーシ語	Lat.	ラテン語	R.	ロシア語
CS	共通スラブ語	Lith.	リトアニア語	SCr.	セルビア・クロアチア語
Cz.	チェコ語	LSb.	下ソルブ語	Skr.	サンスクリット
E.	英語	Mac.	マケドニア語	Slk.	スロバキア語
F.	フランス語	MIr.	中期アイルランド語	Sln.	スロベニア語
G.	ドイツ語	OCS	古代教会スラブ語	Uk.	ウクライナ語
Gk.	ギリシア語	OCz.	古チェコ語	USb.	上ソルブ語
Gmc.	ゲルマン祖語	OIr.	古アイルランド語		

参考文献 (74)

- Arumaa, Peeter. 1964. *Urslavische Grammatik. Einführung in das vergleichende Studium der slavischen Sprachen*. I. Band: Einleitung, Lautlehre. Heidelberg: Winter.
- Benware, Wilbur A. 1995². *The Study of Indo-European Vocalism in the 19th Century, from the beginnings to Whitney and Scherer*. Amsterdam & Philadelphia: Benjamins.
- Bernardo Stempel, P. de. 1987. *Die Vertretung der idg, Liquiden und Nasalen Sonanten im Keltischen*. Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft.
- Бернштейн, С. Б. 1961. *Очерк сравнительной грамматики славянских языков*. Москва: Издательство Академии наук СССР.
- Bielfeldt, Hans Holm. 1961. *Altslawische Grammatik. Einführung in die slawischen Sprachen*. Halle: VEB Max Niemeyer Verlag.
- Birnbaum, Henrik. 1966. *The Dialects of Common Slavic. Ancient Indo-European Dialects* (ed. by H. Birnbaum and J. Puhvel). Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- . 1973. *Common Slavic: Progress and Problems in its Reconstruction*. Columbus, Ohio: Slavica.
- & Merril, Peter T. 1985. *Recent Advances in the Reconstruction of Common Slavic (1971-1982)*. Columbus, Ohio: Slavica.
- . 1987. *Праславянский язык: Достижения и проблемы в его реконструкции*. Москва: Прогресс.
- Борковский, Виктор Иванович & Кузнецов, Петр Саввич. 1965². *Историческая грамматика русского языка*. Москва: Наука
- Bräuer, Herbert. 1961. *Slavische Sprachwissenschaft. I. Einleitung, Lautlehre*. Sammlung Götschen. Berlin: Walter de Gruyter.
- Bray, R. G. A. de. 1980a. *Guide to the South Slavonic Languages. (Guide to the Slavonic Languages, third edition, revised and expanded, part 1)* Columbus, Ohio: Slavica.
- . 1980b. *Guide to the West Slavonic Languages. (Guide to the Slavonic Languages, third edition, revised and expanded, part 2)* Columbus, Ohio: Slavica.
- Broch, Olaf. 1911. *Slavische Phonetik*. Heidelberg: Winter.
- Browning, Timothy Douglas. 1989. *The Diachrony of Proto-Indo-European Syllabic Liquids in Slavic*. Ph.D. Dissertation, The University of Wisconsin.

(74) ロシア語等, 非ローマ字で書かれた文献は, 米国国会図書館の採用する転写方法に従って配列する。例えばロシア字 X, Ч, Ш, Я はそれぞれ Kh, Ch, Sh, Ya の位置に配置されている。

- Булаховский, Леонид Арсеньевич. 1958⁵. *Исторический комментарий к русскому литературному языку*. Киев: Рядянська школа.
- Carlton, Terence R. 1990. *Introduction to the Phonological History of the Slavic Languages*. Columbus, Ohio: Slavica.
- Чекман, Валерий Николаевич. 1979. *Исследования по исторической фонетике праславянского языка. Типология и реконструкция*. Минск: Наука и техника.
- Черных, П. Я. 1952. *Историческая грамматика русского языка. Краткий очерк*. Москва: Учпедгиз.
- . 1993. *Историко-этимологический словарь современного русского языка*. I-II. Москва: Русский язык.
- Comrie, Bernard & Corbett, Greville G. (eds.) 1993. *The Slavonic Languages*. London and New York: Routledge.
- Diels, Paul. 1963². *Altkirchenslavische Grammatik*. I. Teil: Grammatik. Heidelberg: Winter.
- Feist, Sigmund. 1939. *Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache*. Leiden: Brill.
- Фортунатов, Филипп Федорович. 1957. Лукции по фонетике старославянского (церковнославянского) языка. *Избранные труды II*. Москва: Учпедгиз.
- Гамкрелидзе, Тамаз Валерианович & Иванов, Вячеслав Всеволодович. 1984. *Индоевропейский язык и индоевропейцы*. I-II. Издательство Тбилисского Университета.
- Горшков, Александр Иванович. 1994. *Курс старославянского языка в кратком изложении*. Москва: Издательство Литературного института.
- 菱山 忍. 1964-1967. 「ロシア語史概説」(I)～(III). 『古代ロシア研究』No. 5, 6, 8.
- Huntley, David. 1993. Old Church Slavonic. in Comrie & Corbett (1993).
- IPA: International Phonetic Association. 1999. *The Handbook of the International Phonetic Association*. Cambridge University Press. (竹林滋, 神山孝夫訳『IPA ハンドブック』(仮称)(大修館書店. 近刊))
- 石田修一. 1988-1991. 「ロシア語史概説(序説)」(1)～(4). 『大阪外国語大学学報』77, 『大阪外国語大学論集』2, 3, 6.
- . 1996. 「ロシア語歴史文法」. 『ロシア語の歴史』. 吾妻書房.
- Иванов, Валерий Васильевич. 1983², 1990³. *Историческая грамматика русского языка*. Москва: Просвещение.
- Иванова, Татьяна Аполлоновна. 1977. *Старославянский язык*. Москва: Высшая школа.
- Jakobson, Roman. 1929. Remarques sur l'évolution phonologique du russe comparée à celle des autres langues slaves. *TCLP* 2. Praha.
- Jespersen, Otto. 1913². *Lehrbuch der Phonetik*. Leipzig: Teubner.

- 神山孝夫. 1992. 「スラブ語の『娘』をめぐって」. 『ロシア・ソビエト研究』16. 大阪外国語大学ロシア語研究室.
- . 1995. 『日欧比較音声学入門』. 鳳書房.
- Kamiyama, Takao. 1998. On the vowel lengthening of the sigmatic aorist in the prehistory of Slavic, *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures (Japanese Contributions to the XIIth International Congress of Slavists)*, University of Tokyo.
- 風間喜代三. 1978. 『言語学の誕生』. 岩波新書.
- Хабургаев, Георгий Александрович. 1986². *Старославянский язык*. Москва: Просвещение.
- 木村彰一. 1985. 『古代教会スラブ語入門』. 白水社.
- 高津春繁. 1954. 『印欧語比較文法』. 岩波全書.
- Кривчик, Варвара Федоровна & Можейко, Надежда Семеновна. 1985. *Старославянский язык*. Минск: Вышэйшая школа.
- Kuryłowicz, Jerzy. 1956. *L'apophonie en indo-européen*. Wrocław: Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk.
- Leskien, August. 1879. (Anzeige) Miklosich, Fr. Ueber den Ursprung der Worte von der Form aslov. *тътъ*, Wien 1877. *Archiv für slavische Philologie*, Bd. 1.
- . 1890. *Грамматика старославянского языка*. Москва: Издание типогр. и словол. О. Геобека. (*Handbuch der altbulgarischen (altkirchenslavischen) Sprache*, 2-e Auflage, Weimar, 1886 の露語版)
- . 1962. *Handbuch der altbulgarischen (altkirchenslavischen) Sprache*. 8-e, verbesserte und erweiterte Auflage. Heidelberg: Winter.
- Lunt, Horace G. 1974⁶. *Old Church Slavonic Grammar. Toward a Genarative Phonology of Old Church Slavonic*. Tha Hague, Paris: Mouton.
- Mareš, František Václav. 1965. *The Origin of the Slavic Phonological System and its Development up to the End of Slavic Language Unity*. Translated by J. F. Snopek and A. Vitek. Ann Arbor : The University of Michagan.
- . 1991². Vom Urslavischen zum Kirchenslavischen. Peter Rehder 編 *Einführung in die slavischen Sprachen* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 所収. (神山訳「スラブ祖語から教会スラブ語へ——スラブ文語前史概説——」『大阪外国語大学論集』15 (1996)).
- Martinet, André. 1952. Langues à syllabes ouvertes: le cas du slave commun. *Zeitschrift für Phonetik und allgemeine Sprachwissenschaft*, 6.
- . 1955. *Économie des changements phonétiques*. Berne: Francke.

- . 1994². *Des steppes aux océans — L'indo-européen et les «Indo-Européens»* ——.
Paris: Payot. (神山訳「ステップから大洋へ——印欧語と『印欧人』——」(その1)～(その6)『大阪外国語大学論集』16(1997)-22(2000)).
- Матвеева-Исаева, Любовь Васильевна. 1958. *Лекции по старославянскому языку*.
Ленинград: Учпедгиз.
- Meillet, Antoine. 1934. *Le slave commun*. Seconde édition revue et augmentée avec le concours de A. Vaillant. Paris: Champion. (露語版: А. Мейе, *Общеславянский язык*, Москва: Издательство иностранной литературы, 1951.)
- . 1937. *Introduction à l'étude comparative des langues indoeuropéennes*. 8-e édition refondue. Paris: Hachette. (露語版: *Введение в сравнительное изучение индоевропейских языков*, Москва-Ленинград: Социально-экономическое издательство, 1938.)
- Mikkola, J. J. 1913. *Urslavische Grammatik. Einführung in das vergleichende Studium der slavischen Sprachen. I. Teil: Lautlehre, Vokalismus, Betonung*. Heidelberg: Winter.
- . 1921. La question des syllabes ouvertes en slave commun. *RES*, 1.
- Miklosich, Fr. 1852. *Vergleichen Grammatik der slavischen Sprachen, erster Band: Vergleichende Lautlehre der slavischen Sprachen*. Wien: Wilhelm Braumüller.
- Nahtigal, Rajko. 1938, 1952². *Slovanski jaziki*. Ljubljana: Jože Moškrič. (ドイツ語版 *Die slavischen Sprachen*, Wiesbaden: Harrassowitz, 1961; 露語版 *Славянские языки*, Москва: Издательство иностранной литературы, 1963.)
- O'Neil, J. L. 1970. The Treatment of Vocalic R and L in Greek. *Glotta: Zeitschrift für griechische und lateinische Sprache*, v. 47.
- Palmer, Leonard R. 1980. *The Greek Language*. London: Faber & Faber.
- Pedersen, Holger & Lewis, Henry. 1937. *A Concise Comparative Celtic Grammar*.
Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Pokorny, Julius. 1959. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. I-II. Tübingen-Basel: Francke Verlag.
- 佐々木秀夫. 1982. 『ロシヤ古文典』. ナウカ.
- . 1985. 『ロシヤ古文典《音韻考》』. ナウカ.
- Saussure, Ferdinand de. 1940. 『一般言語学講義』. 小林英夫訳. 岩波書店.
- Schenker, Alexander M. 1993. Proto-Slavonic. in Comrie & Corbett (1993).
- . 1996. *The Dawn of Slavic. An Introduction to Slavic Philology*. New Haven and London: Yale University Press.
- Schleicher, August. 1852. *Die Formanlehre der kirchenslawischen Sprache*. Bonn: Verlag von H. B. König.

- . 1861. *Compendium der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. I. Kurzer Abriss einer Lautlehre der indogermanischen Ursprache, des Altindischen (Sanskrit), Altiranischen (Altbaktrischen), Altgriechischen, Altitalischen (Lateinischen, Umbrischen, Oskischen), Altkeltischen (Altirischen), Altslawischen (Altbulgarischen), Litauischen und Altdeutschen (Gotischen)*. Weimar: Hermann Böhlau.
- Schmalstieg, William R. 1983². *An Introduction to Old Church Slavic*. Columbus, Ohio: Slavica.
- Селищев, Афанасий Матвеевич. 1951. *Старославянский язык. часть первая: введение, фонетика*. Москва: Учпедгиз.
- Трубачев, О. Н. (ред.) 1974-. *Этимологический словарь славянских языков. Праславянский лексический фонд*. Москва: Наука
- Шахматовъ, Алексей Александровичъ. 1915. Очеркъ древнѣйшаго періода исторіи русскаго языка. *Энциклопедія славянской филологіи*. выпуск 11.1. Петроградъ: Типографія императорской академіи наукъ.
- Shevelov, George. 1964. *A Prehistory of Slavic—The Historical Phonology of Common Slavic*. Heidelberg: Winter.
- Szemerényi, Oswald. 1990⁴. *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Townsend, Charles E. & Janda, Laura A. 1996. *Common and Comparative Slavic: Phonology and Inflection with Special Attention to Russian, Polish, Czech, Serbo-Croatian, Bulgarian*. Columbus, Ohio: Slavica.
- Trubetzkoy, Nikolaus S. 1968². *Altkirchenslavische Grammatik. Schrift-, Laut- und Formensystem*. Graz-Wien-Köln: Herman Böhlau Nachf.
- Vaillant, André. 1950. *Grammaire comparée des langues slaves*. Tome I: Phonétique. Lyon: IAC.
- . 1964². *Manuel du vieux slave*. Tome I: Grammaire. Seconde édition revue et augmentée. Paris: Institut d'études slaves.
- Vlasto, Alexis Peter. 1986. *A Linguistic History of Russia to the End of the Eighteenth Century*. Oxford: Clarendon Press.
- Vondrák, Wenzel. 1906. *Vergleichende slavische Grammatik*. I. Band: Lautlehre und Stammbildungslehre. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.
- . 1912². *Altkirchenslavische Grammatik*. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.
- Watkins, Calvert. 1985. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Boston: Houghton Mifflin Company.

- Wijk, Nicolaus van. 1931. *Geschichte der altkirchenslavischen Sprache*. Erster Band: Laut- und Formenlehre. Berlin-Leipzig: Walter de Gruyter. (露語版 Ван-Вейк, *История старославянского языка*, Москва: Издательство иностранной литературы, 1957.)
- . 1956. *Les langues slaves de l'unité à la pluralité*. s'-Gravenhage: Mouton & Co.
- Якубинский, Л. П. 1953. *История древнерусского языка*. Москва: Учпедгиз.
- 山口 巖. 1995. 『類型学序説』. 京都大学学術出版会.
- Янович, Елена Ивановна. 1986. *Историческая грамматика русского языка*. Минск: Издательство «Университетское».

Summary

The Proto-Indo-European Syllabic Liquid in Slavic

—The *Law of the Open Syllable* and Supposed Metathesis
in its Prehistory—

KAMIYAMA Takao

The aim of the present paper is to propose a new view on the development which the Proto-Indo-European (IE) so-called *syllabic liquid* is assumed to have gone through in the Slavic branch. It challenges the widely accepted one, originated from Miklosich and having been authorized since Leskien's *Handbuch*.

In the last stage of the IE linguistic unity its phonological system contained the syllabic liquid, which was not preserved principally in any branch of the linguistic family in question, and which, as a rule, developed a secondary *anaptyctic* vowel so that the syllabicity of the liquid could be avoided. The earliest stage of the Slavic prehistory (Proto-Slavic: PS) employed a close vowel, *i* or *u*, before the ex-syllabic liquid, which process is basically common to Baltic and Germanic as well. Just before the break-up of the Slavic linguistic unity (Common Slavic: CS) the sequence developed into "reduced vowel *jer* (*ь/ѣ*) + liquid (*r/l*)" in the traditional notation.

Old Church Slavic (OCS) reflex of the sequence, when it is situated between consonants, is spelt "*r/l* + *ь/ѣ*", which was supposed to be realized phonetically as a *syllabic liquid* again. This idea was first uttered by Miklosich in 1850, but seems to be generally misunderstood and attributed to the leading *Junggrammatiker* Leskien, under whose authority it has been accepted by the absolute majority of scholars since his influential work *Handbuch* came out.

But, we dare say, the generally accepted phonetic realization of the OCS sequence is far from probable, in that, above all, it must presuppose an *ad hoc* loss

of *jers* exclusively in this position, and, furthermore, OCS has another set of sequences which are equally noted as “*r/l + ь/b*”, but directly continue the IE sequences “*r/l + i/u*”, thus must be read just as they are written, i.e. “liquid + vowel”. It is by no means imaginable that such a strict orthographic system of OCS should have permitted the same notational sequence to correspond to two completely different phonetic realizations.

Occam’s razor would tell us here that it is far more probable to posit that OCS applied *metathesis*, triggered by the *law of the open syllable*, in the sequence in question, which thus must have been pronounced as it is written. And, what is more, it holds true regardless of its origin: stemming from the IE syllabic liquid or not. This development is assumed to be common not only to all of the south Slavic languages, but also to Slovak and, to some extent, Czech, whereas the others to the north (Russian, Polish, etc.) did not experience this process and finally lived with the closed syllable in “*jer + liquid*” which was left behind in the earlier syllable opening processes.

The author has come to this conclusion independently, but feels encouraged because it turns out that this view is also shared virtually with such brilliant scholars as Schleicher, Šakhmatov, Martinet, Bräuer and Čekman.

Provided that the above mentioned reasoning is plausible, we can conclude in addition that the *law of the open syllable* expired considerably earlier than the loss of *jers* in Slavic linguistic history.

(on the last Christmas of the twentieth century)